

[基調講演 I]

「悲惨な記憶—ツーリズムによる、悲しみ、惨事、歴史の過ち、そして悪の表象」

ディーン・マッカネル（カリフォルニア大学デーヴィス校名誉教授）

ヒロシマやアウシュビッツのような目的地の人気は、観光客が単に、日々の単調なルーティーンから逃れ、楽しい時間とエンターテインメントを欲しているのだと考える、今日の「ポストモダン」理論への、異議申し立てである。本発表は、「悲惨な記憶」を導き出す目的地訪問が「特殊なタイプ」のツーリズムではないと論じる。観光客・アトラクションは、楽しいものであれ、恐ろしいものであれ、善と悪に対する人間の全ての可能性との一体感を呼び起こす。ディズニーランドやバリ島への旅でもそうである。ニーチェ、ヴァルター・ベンヤミン、ジャック・デリダに倣って、本発表は、各々のアトラクションが、どのようにトラウマを抑圧あるいは否定し、歴史の真実に抗っているかを調べるというアプローチをとる。トラウマをもたらす出来事が規範として記憶されるのは、元々の、そして現在も続く争いが、表象の実践として具現化される時である。悲惨な記憶の多くは、無意識のうちに記録されるか、あるいはまったく記録されることがない。このことが観光客に、ほとんど助けなしに、歴史の真実を発見しなければならないという倫理的負担を負わせている。実際、地球上のあらゆる場所が、悲惨な記憶と楽しい記憶の双方を導き出す旅の目的地として考えられる。悲惨な記憶のあるべき場所は、最終的に、観光客の心と精神の中だけであり、現地の博物館や記念碑ではない。現地にあるこうした装置は、物語を語り継ぐという機能を果たすだけである。